
俺の秘密

和泉 優衣

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の秘密

【Nコード】

N8780H

【作者名】

和泉 優衣

【あらすじ】

蘭を待たせたお詫びに、トロピカルランドに誘うが体調不良で行けなくなり。新×蘭です。処女作なので突っ込みどころ満載です……。感想・評価お願いします。

FILE 1：終始

黒の組織を倒し、手に入れたAPT X 4 8 6 9のデータから、灰原が解毒剤を完成させた。

俺は悪いとは思ったが、蘭や少年探偵団のみんなには真実を教えない事にした。

だって真実を言っても迷惑がかかるだろ？

いきなり、

「江戸川コナンは工藤新一でした。」

なんて言えるか？

みんな反応に困るだろうし、蘭には今までどおりに接してもらえなくなるかもしれない。

だから真実を言わずに小学校のクラスのみんなにお別れをした。

” 海外にいる両親の元へ帰る ”

海外はとにかく遠いイメージらしく、歩美、光彦、元太はショックを隠しきれないみたいだった。

「コナン君、行かないで・・・。」

「ごめん。歩美。行かないやいけないんだよ・・・。」

「また会えますよね!？」

「光彦・・・おめーらに手紙かくから。」

「毎日か!？」

「そんな毎日もかけつかよ。1カ月か2カ月に1通でいいだろ?」

「絶対だよ!？」

「寂しくなりますね……。」

「寂しくてご飯2杯くらいしか食べれなさそうだぜ……。」

（ コナンはいなくなるけど、同じ街に住み続けるんだよな・・
・ ）

母さんに頼んで「コナンの母親」江戸川文代”として迎えに来てもらった。

「寂しくなるね……。」

「楽しかったよ。またね……蘭姉ちゃん。」

「またいつでも来てね!」

蘭は泣いていた……。

ごめん・・・、ごめんな・・・蘭。

俺は蘭を泣かせることしか出来ないのか・・・？

でももう少しで工藤新一として会いに行けるから・・・。

待っててくれ・・・蘭。

FILE 1：終始（後書き）

短かったので9月22日に大幅修正しました。

FILE 2：解毒（前書き）

遅くなってしまいました。次からは頑張ります。

FILE 2：解毒

「なにかあつたら連絡しなさいよ。」

「分かつてるよ。・・・まあ30分しても戻って来なかったら一応様子見に来てくれねえか？もしかしたら死んでるかもしれないからな・・・。」

「ええ。分かったわ。それにデータもとりたいしね・・・。」

「おう。じゃあな!!」

解毒剤を受け取ると、俺は自分の家に行った。

”工藤新一”の家に。

着替えと水を準備して、解毒剤を飲んだ・・・。

ドクッドクッ

この感じ・・・

「・・・ッ！」

・・・どうやら上手くいったようだ。

やっと戻れた。

工藤新一に。

やっと・・・

本当の声で言えるんだ。

蘭。

・・・それにしても、体がだるい。

「工藤くん、生きてる？」

「・・・ああ、灰原か。」

「工藤くん、30分しても戻って来ないんだもの。心配したじゃない

い。」

「わりい……。」

「それより、調子はどう？」

「なんか、体がだるいし、つらい……。」

「幼児化した体が元に戻ったからよ。相当な体力を使ったからだと思っわ。蘭さんに会うのは明日で良いんじゃない？あとは栄養剤でも飲んで休んでたほうがいいわよ。」

「そうだよな。今日はおとなしく寝て、会うのは明日にする……。」

「そう言っと、俺は眠りに就いたのだった……。」

FILE 2：解毒（後書き）

感想お願いします¥^^/

FILE 3：再会（前書き）

また遅くなってしまいました・・・。次は早くできるはず・・・。
* * *
）

FILE 3：再会

「ん・・・」

あれから何時間寝たのだろうか。

・・・時計を見ると朝の7時すぎだった。

せつかく戻ったんだから、早速高校に行くか・・・。

ずっと行ってなかったから、留年か？復学させてくれるのか？
疑問はあったがここで考えても仕方がない。

とりあえず、蘭の家まで行こう。一緒に通学するために。迎えに。

俺は久しぶりに高校の制服を着た。懐かしかった。

俺は朝ごはんを食べずに家を出た。本当の体で一刻も早く蘭に会いたかった。

・・・コナンの時に毎日みてたこの家。

小学生から高校生になったから景色が全く違ってみえる。
背が伸びたということもあるが、この姿で会える喜びや緊張のせいでもある。

でも俺、本当に戻れたんだなあ・・・。
もうコナンじゃないんだよなあ・・・。

ピンポン

「らん。」

呼んだら、蘭がすぐに出てきた。

「・・・新一？」

「蘭。おはよ。」

「おはよ、じゃないわよ。一体どこ行ってたのよ！心配したんだよ！」

「わりい・・・事件がなかなか片付かなくてよ。」

「支度してくるから・・・ちょっと待ってて。」

1年も待たせてしまったから一発くらい殴られると思ったが、やられなかった。

ただ、俺を見たときの泣きそうな顔は一生忘れられなさそうだ。

やっぱり蘭に悪いことしちゃったなあ・・・。

「新一、お待たせ。」

同じ高校の制服を着た蘭が出てきた。

今日から一緒に居れるんだ。

「ねえ新一、風邪ひいてる？」

「え？ひいてないけど・・・」

何の話かと思えば・・・。

「そうなら良いんだけど。新一と会うとき、いつも新一具合悪そうだからさ・・・。」

「そうか？気のせいだよ。」

そっか。

蘭に会うときはいつも副作用で具合悪かったかもな・・・。
てか蘭はそんなことまで覚えてるのか。

FILE 4：登校

「そういえば、長い間待たせちゃったからお詫びに、トロピカルランド行かないか？」

「え、うん。行く！」

「明日、土曜日だから、明日でいいか？」

「新一と行けるならいつでもいいよ！」

「じゃあ明日な！約束！」

「あれ〜！？」

うわっ

園子・・・。

なんでいるんだよ！

同じ学校だから仕方ないけど……。

「蘭！よかったじゃない。待ちに待ったダンナが帰ってきて……。

」

「あ、うん！嬉しいよ。」

「てか蘭を置いてどこ行ってたの！？蘭、すごい心配してたんだよ？」

あゝ。説教かよ。

これだから園子には会いたくないんだよ。めんどくせえ。

「まあまあ、せっかく帰ってきたんだからこれくらいに……。」

「蘭がそういうなら許すか……。今度蘭を置いて居なくなったら許さないからね！」

「わーっ たよ。」

「あれ！工藤じゃん。」

「死んだって噂だったのに。」

「てか復帰早々夫婦で登校かよ！いいな！。ラブラブ！。」

クラスメイトが騒ぎ立てる。

「・・・てか、死んでたらここにいなーよ。」

「・・・！工藤、久しぶりの登校だな。」

「あ、お久しぶりです。先生。あのー、俺って留年ですか？」

「あゝ。それは大丈夫だと思う。お前は成績もいいし、休んでたのも事件かなんかに首つつこんでたんだろ？」

「事件……。まあ、そんなもんですね。」

留年はなんとか避けれたようで安心した。体が戻っても、留年したら意味がないからな……。

……。俺は、明日トロピカルランドに行くことで頭がいっぱいだっ
た。

FILE 5：早退

「藤！ 工藤！」

「・・・はい？」

「お前聞いてなかっただろ？」

「あ、ごめんなさい。」

「やばいやばい。ぼーっとしてた・・・。」

「次は好きな体育の授業だ。」

「しかもサッカー！！」

授業が始まって、座って先生の話を聞いていた。

そのあと準備体操で立とうとしたら、いきなり視界が真っ暗になった。

周りが見えるようになると、俺は砂の上に倒れていた。

俺・・・倒れた？

「・・・っ」

起き上がろうとしても起き上がれない。

「大丈夫か？工藤。」

「すみません。大丈夫です・・・」

結局、助けられながら、グラウンドのベンチに座らされた。

ははは。サッカー見学なんて・・・。

しかも、なんか、調子わりいし……。

外にいても治りそうになかったし、サッカーを見てるだけっていうのがなんとも悔しかったので、保健室にいくことにした。

「あれ？新一は？」

「あゝ、工藤なら保健室に行っただぜ。体育の時男女別にやってるから知らないのか。」

「新一、何で保健室に行ったの？」

「え？なんか調子悪かったみたいだぜ。」

「・・・明日、行けるのかな？」

彼女は小さくつぶやいた。

保健室に行くと、保健の先生がいなかったから勝手に体温を測った。

37.5・・・

微熱だけど明日までに治すために早退することにした。

「しんいち？」

保健室には誰も居なかった。

「蘭。ダンナ、早退したみたいよ。」

「え！園子、なんで知ってるの？」

「なんか、職員室で先生に言ってたの。早退しますって。」

「新一、大丈夫かな？」

「明日とかにダンナの看病してあげたら？きっと喜ぶわよ。」

「うん……。」

めったに風邪をひかない新一が早退するなんて、少し半信半疑だった。

FILE 5：早退（後書き）

まとめて何話か執筆しました。執筆した分全部投稿したので読み逃
しのないように（。――）。。

FILE 6：高熱

昨日、部活が遅くなって帰りに新一の家によれなかった。

だから私は新一に家に帰ってすぐメールした。

《新一大丈夫？》

すぐには返ってこなかった。そして、寝る前にやっと返ってきた。

《明日行けない》

調子が悪いのだろうか。

行けなくなることの予想はしていたがやはりショックには違いなかった。

”ダンナの看病してあげたら？”

ふと園子の言葉を思い出す。

まだ朝の6時だというのに蘭は走りだしていた。

新一の具合が気になるし、もしかしたら新一がまた居なくなっているかもしれないと思うと不安になって・・・。

インターホンを連打しても返事がなかった。だから電話してみた。

新一が電話に出た時は安心した。

新一に言われたとおり、私は門を開けて、中に入っていた。

新一はリビングのソファアームに座っていた。灰色のスウェット上下。部屋は冷えていてヒーターはついていてるけどまだついたばかりのようだ。

「起こしちゃったみたいだね。」

「いいよ・・・。てか今日はごめん・・・。」

確かに顔色はあまりよくなかった。返事をするのもつらそうだし、寝起きだからか反応もおそかった。

「うつん。気にしないで。お粥食べる？」

「あゝ……。食べる。」

「それまで上で寝ときな。」

「じゃあそつする。」

・・・お粥を作るのはそんなに大変じゃなく、新一が上に行つて10分くらいで上がつてしまった。

「新一、出来たよ。」

返事がないから少しためらつたが部屋に入った。

「ら……。ん。」

寒くて震えているみたいだった。

「新一、熱あるんじゃない!？」

とりあえず体温計を探して手渡すと、布団を持つてくることにした。

布団を持つてくると測り終わっていたらしく、新一が私に体温計を差し出した。

” 39.5 ”

こんな高い熱なのに、本当に風邪なのかが疑問だった・・・。

FILE 6：高熱（後書き）

更新頑張ってます。感想ください（＾－＾）

FILE 7：疲労

家に帰ってもこのだるさが治ることはなく、むしろ悪くなっている気がした。

家に帰るのもふらふらで大変だった。

《新一、大丈夫？》

蘭だ。俺の事心配してくれてるのか。

でもこのままの調子じゃ行けないよな……。行っても迷惑だろうし……。

どうしよ……。

……。

！

俺は悩んでいるうちに少し寝てしまったようだ。でもまだ調子が悪かった。ので諦めて返信した。

《明日行けない。》

蘭、ショックかな・・・？それとも嫌われたか？

俺から誘ったのに。

ピンポーン

（ まだ6時だったのにだれだよ・・・？）

ピンポーン

・・・。

）
）
）

チャイムが鳴りやんだかと思えば、携帯が鳴った。

「・・・はい。」

新一？新一の家まで来ちゃったんだけど・・・。

蘭だった。朝早く何しに来たんだ？

「多分開いてるから勝手に入って・・・。」

動くのがだるい。

蘭がお粥を作ってくれるみたいだ。うれしい。

蘭がお粥を作ってる間、上で寝ることになった。

・・・

部屋に入ってベットに横になると、急に寒くなった。

「新一、出来たよ。」

返事をしようと思ったのに返事が出来なかった。しかし蘭は少しするとドアを開けて入ってきた。

「ら．．．ん。」

「新一、熱あるんじゃない!？」

そう言っで体温計を渡すと、どこかに行ってしまった。

ピピッ

39.5 か．．．。

（ なんなんだ。風邪にしては高くないか？まだ解毒剤飲んだときの疲れが残ってるのか？）

蘭が布団を持って戻ってきたので、体温計を差し出した。

” 39.5 ” という高熱に蘭も驚いていた。

・・・なんなんだよ。なんでこんなに体が重いんだよ。

「・・・。」

とにかく体がだるかった。

FILE7：疲労（後書き）

いまのところ毎日更新できてます¥^^/
↓ジ下さい(^^)(/

頑張るのでメッセ

FILE 8：失敗（前書き）

更新遅れてごめんなさい、

行き詰まってきました（――；）

この前初めてメッセージ貰いました＼^^^／

ありがとうございます！

これからも頑張ります（^^-^^）

FILE 8：失敗

。

寝てたのか・・・。

いつのまにか額に熱冷ましのシートが貼られていた。

しかし、体は一向に治る気配が無い。

これは薬の副作用なのか・・・？

灰原に聞いてみつか・・・。

。あら、なあに？工藤くん・・・。恋愛の話ならお断わりよ？

「恋愛・・・ちげーよ。俺さ、あの薬飲んでからどうも調子悪くて

よ、今日熱測ったら39.5だった。」

・・・で？

「・・・。これって解毒剤の副作用かなんかか？」

あらあら。私が作った薬が信じられないのかしら・・・。

「別にそういつつもりはねーよ。」

そう・・・。でも残念ながら。

「・・・え？」

「新一。誰と電話？」

「あ．．．蘭。別にたいした電話じゃねーよ。」

「そっか．．．。ちょっと飲み物持ってくるね。」

（ ！ ）

「．．．ッ」

急に心臓をつかまれたみたいに胸が苦しくなって咳がとまらなくな
った。

息をするのも大変で、

俺は声を出して蘭を呼ぶことも出来なかった。

「新一！？どうしたの！？」

（蘭・・・。）

「・・・。」

体が熱い・・・。

声が出ないし、苦しかった。

「ぐあ・・・。」

「新一！」

（　　）

新一の体はとても熱かった。脈も異常にはやかった。しかも苦しみが普通じゃない。

「・・・ッ」

「待ってて！いま救急車呼ぶから！大丈夫だからね！」

（ 呼ばなくていい！ ）

声は届かず蘭は電話へと急ぐのだった。

ピンポーン

ガチャッ

・・・え？誰？この人・・・。見たことない・・・。

「え、えつと・・・誰ですか？」

訪問者は無言で中に入っていくのだった。

FILE 9：訪問（前書き）

また遅れました（――；）

次こそは・・・。

メッセージください（^^）¥／

10・12

FILE 9：訪問

突然やってきた女の人は一のそばにより、なにかの薬を飲ませていた。

しばらくすると新一は楽になったらしく、さっきの苦しみは嘘のように笑っていた。

「あら？何を驚いてるのかしら。いつまでも小さい私でいるとも思っただの？」

「灰原ってそんな大人だったんだなって思っただけだよ。」

「失礼ね。私はもう灰原哀じゃなくて宮野志保よ。」

「ああ。わりい。でもよ、さっきの電話本当か？」

「ええ。間違いないわ・・・。」

「なんでわかつたんだ？」

「・・・え？」

「・・・お前、自分の体で試しただろ？」

「・・・これ以上迷惑かけたくなかったのよ。」

新一に何の薬を飲ませたの？なんで治つたの？

あの人は誰なの？新一と何の話をしてるの？

それに、新一・・・。

あの苦しみ方はなんなの？なにがあつたの？あれは普通じゃないよ・

・・。

なんかの病気なの？なんで言ってくれないの？

ねえ新一・・・なんでなの？

女の方は新一に何か渡すと帰っていった。

「・・・新一。」

「ん？」

「さっきの人、誰？」

「・・・どうでもいいだろ。」

「新一のことが心配なんだよ……。さっき何もらったの？」

「ただの薬だよ。」

「新一、本当にただの風邪？心当たりとかないの？」

「風邪だよ。もう大丈夫だから心配すんな。」

でも残念ながらあれは失敗作だったの。

・・・あの灰原が失敗作？

これ、とりあえず毎日飲んで。副作用はおきないはずよ。
出来るだけはやくつくるからそれまで飲んで・・・。

渡されたのは何日分か分からない大量の薬。

これをつくるのにも時間かかったんだと思うと感謝の言葉しか出てこなかった。

FILE 10：最低（前書き）

サブタイに毎回悩んでいます（、；、）

頑張ります・・・

10・16

FILE 10：最低

解毒剤を渡した時、工藤くんはとても喜んでいた・・・。

なのに・・・。

私があこの組織であんな薬開発しなければよかったのに・・・。

それに解毒剤も失敗作だった。

私のせいで工藤くんはとても苦しんだ。

だからとりあえず鎮痛剤が効いてよかった。

もし効かなかったら新しい解毒剤が完成するまで苦しんでもらうしかなかった。

今まで私は工藤さんに喜んでもらいたいから解毒剤をつくってきた。

罪滅ぼしの意味もあるけど、笑っている工藤くんを見てたくて……。

私、工藤くんのが好きだったんだ……。

ずっと前から1人の女性として見てもらいたかった。

でも工藤くんの隣には蘭さんがいた。

2人は昔からの友達でとても仲が良かった。

そんな2人の間に私が入る隙間なんて1ミリもなかった。

解毒剤を完成させてしまったら工藤くんが私のところから離れ、蘭さんのところへ行ってしまうのは分かっていたから……。

だから失敗作なんかになったんだ。

このままでいたかった。

このまま幼児化したまま灰原哀と江戸川コナンならずっと一緒にいれる。

心の奥にはそういう気持ちがあった。

宮野明美と工藤新一で一緒にいることは許されないこと……。

薬が完成しなければずっと一緒にいられる。

だから無意識に失敗作を作り上げてしまった。

私は最低なことをしてしまった……。

それで工藤くんをつらくさせてしまった……。

ごめんなさい……。

FILE 11：約束

気まずい。

さっき少し冷たくしてしまった。

これ以上ばれるのが怖くて。

この空気を先に崩したのは蘭だった。

「新一。大丈夫？」

「……え？」

「新一、いま怖い顔してた。調子大丈夫……？」

「え、ああ……。さっきよりはいいかな……。」

「よかった……。」

「さっき新一が苦しんでた時、何もしてあげなかったね・・・。
あの女の方が私よりもいいんじゃないのかなあ？新一の隣に居
るのは私じゃなくても・・・。」

「違う。」

「何が違うの？新一。」

「さっきの女は・・・。」

そこまで言ってから気がついた。解毒剤の話をしてしまったら俺の
正体を明かすことになる。

だからとっさに嘘をついてしまった。

「俺、病気だから・・・。」

「え？新一、病気なの・・・？」

「ああ。それでさっきの人は病気の研究者。俺に薬を渡しに来ただけだよ。」

「そうだったんだ・・・。教えてくれてもよかったのにね。」

「ああ。いままで黙っててわるかったな。」

とっさについた嘘が笑える。もっといい嘘があったんじゃないのか・・・？

それに蘭についた嘘が増えてしまった。まあこれも病気といえば病気なのだが・・・。

自分の正体、黒の組織、自分の気持ち・・・いつまでも蘭に隠し通そうとしている自分に笑えてくる。

どうせいつかはばれてしまうんだ。

本当のことを言うべきだったか？いつそのこと言ってしまったほうが楽なんじゃないのか？

「それって治る病気なの・・・？」

「いや・・・。」

「え・・・。」

「・・・俺は大丈夫だから。蘭。だから・・・隣に居るのは私じゃなくてもいいなんて言うなよ・・・。」

「だつて・・・。」

「俺の隣は蘭だけだからな。蘭が俺のこと嫌なら仕方ないけど、俺は蘭がいいから・・・。」

「私も新一じゃないと嫌だよ。だから・・・病気を治してね。」

「ああ。絶対・・・。」

治してみせるさ・・・。

そしたら蘭に言わなきゃな・・・。

FILE 11：約束（後書き）

新しい作品に手をつけてしまいました（ゝ）

そっちの方もよろしくです（^^）¥／

10・18

FILE 12：謝罪

ピンポン

ガチャッ

「灰原。」

「あら・・・何の用かしらもう話す事ならないわよね？それに、私は灰原じゃない、宮野よ。」

「わりい、宮野・・・用がなかったらこねーよ。・・・てか！お前もしかして泣いてたのか？」

「・・・私は泣くのも許されないのかしら？」

「そうじゃねーよ。何で泣いてんだよ？」

「解毒剤、失敗してごめんなさい・・・。私、結構前から工藤くんのこと好きだったみたい・・・。だから・・・。」

「俺もさ、宮野のこと、結構好きだったぜ。・・・もちろん蘭には負けるけどな。」

「・・・気付いてたの？」

「バーロオ・・・俺は探偵だぜ？宮野が失敗なんていままでなかったし、組織を倒した時にデータは十分とったからな。それで失敗作ができたならそういう事だろ？」

「ごめんなさい・・・。」

「そんなに謝らなくていいよ。鎮痛剤も宮野が作ったんだからもういいだろ？それに・・・お前はいつでも俺の相棒だからな！」

「ありがとう・・・。」

「だからさ・・・あの・・・。」

「はい。」

宮野が差し出した手にはカプセル状の薬があった。

「え？」

「あら？いらないの？いらなら捨ててよ？」

「これって・・・。」

「言わないと分からないの？APTX4869の解毒剤よ。」

「・・・もうできたのか？」

「ええ。少し改良したら出来たの・・・。」

「確率はどのくらいだ？」

「100%……。これで失敗したら首吊っても良いわよ。」

「別に首吊らなくてもいいけど……。やけに自信満々だな？」

「だって次失敗したら、さすがのあなたも私のこと嫌いになるでしょう？もう1人にはなりたくないの……。」

「俺は宮野と一緒にすることは出来ないけど、だからといって宮野を1人にはしないぜ？」

「ありがと……。あなたには助けてもらってばっかね。」

「宮野こそ解毒剤、ありがとな！」

これで完全に戻れる……。

宮野……ありがとな。

マジで感謝してる。

蘭、もう少しだから……。

解毒剤を受け取ると俺は駆け足で家に戻るのだった。

FILE 12：謝罪（後書き）

この連載もそろそろ終わりごろです。

感想、評価お願いします（o^ ^o）

連載“伝えたい・・・” 完結しました。

そちらの方もよろしくお願いします。

10・18

FILE 13：不安

「新—どこ行つてたの？あんまり寝てないんだから寝てたほうがいいんじゃないの？」

「ああ。そ—する。」

確かに蘭の言うとおりだ。発作の時に薬を飲んだけど、それで完全に治つたわけではないのだ。

現にまだ体が重い。

もらった解毒剤を飲むときは体力が必要だ。あの痛みは半端ではない。この体では耐えきれないかもしれない。

・・・死ぬのか？

もしこの体が耐えきれなかったら・・・。

それとも戻れないだけか？

「新一、もうさつきみたいにならないう？大丈夫？」

「発作のことか？それは分からない・・・けど薬があるから大丈夫・
・・・」

「そっか、よかった。・・・もう夜だけど帰りたくないよ・・・」

気がついたらもう夜の8時くらいだった。いつもなら蘭は帰らなければならぬ時間だ。

「帰りたくない・・・。今、新一を1人にするのがものすごく怖い
よ・・・。」

「・・・なんで？」

「新一がまた私の前から居なくなるんじゃないか、って・・・。今
かえって明日来たら死んでた、なんてヤダよ・・・？」

「蘭は大げさだな。これくらいじゃ死なないって・・・。」

「だって・・・心配なんだよ。」

「じゃあ俺ん家に泊まってくか？そうすれば帰らなくていいだろ？」

「え、泊まっていいいの？」

「この家に1人つてのは結構寂しいんだぜ？それに・・・まあ、居たほうが安心だからよ。蘭はいいのか？俺ん家泊まっても・・・親とか。」

「うん。多分許してくれると思う。お父さんに電話してくるね。」

「お父さん、オッケーしてくれたよ！病気なら一緒に居てやれだつて。」

「はは。よかった。」

「うん。あ！どこで寝ればいいかな？」

「どこでもいいよ。空いてる部屋ならいっぱいあるし……。」

「じゃあ隣の部屋にする。なにかあったら呼んでね！すぐ行くから。」

「ああ。ありがとう。」

いつにしようか？

いつなら大丈夫？

俺はいつ戻る？

もし、解毒剤を飲んで、そのまま死んだら？

もとに戻るところか、蘭に伝えることも出来ない。

嫌だよ・・・。

考えても答えは出なかった。

FILE 13：不安（後書き）

1週間ぶりですね・・・。

次の連載とかについてメッセージとかくださるとうれしいです。

FILE 14：実行

「蘭、実はさ……。」

「なあに？」

「江戸川コナンって居ただろ？あれ、俺なんだよ。」

「コナンくんが新一？……。」

「今まで黙っててごめん……。」

「知ってたよ。なんとなく。仕草もそっくりだし。」

「気付いてたのか……。」

「言ってくれてありがとう。待ってたんだよ。それに……もう完全に治ったんでしょ？」

「多分完全だよ。」

「元気な新一が戻って来てくれただけで嬉しいから……。」

「ありがとう……あっ……蘭！よけろ！」

ものすごいスピードで走行するトラックが迫って来た。

「え？」

（ばかっ）

とっさに蘭を突き飛ばした。

「……ッ」

目の前が真っ暗になった。

「新一……?」

「しんいち!」

蘭。

「ん……。」

「苦しいの?」

「え?」

「新一、ずいぶんうなされてたよ……。?」

「……。?」

（ 寝てたのか？）

「発作とかじゃない？平気？」

「・・・発作じゃないよ。」

「良かった。」

「ああ。そーだな。」

（ あれは夢か？体が復活して、蘭に全てを打ち明けた時に車にひかれるなんてやな夢だったなあ・・・。）

「今日は調子いい？」

「そつえば今日はだるくないな。」

“ 今日なら薬飲んででも平気だろうか”

・・・よし。

今日飲もう・・・。

今日は調子がいいから大丈夫だよな。

それに・・・体の変化とかしないから・・・。

「なあ、蘭。いまから薬飲むから別の部屋行ってくれねーか？」

「いいけど・・・。薬くらい私の前で飲んでもいいのに。」

「特別な薬なんだよ。もしさ、10分しても出て来なかったら様子見に来てくれないか？」

「うん・・・。」

一応着替えや水などを準備してから薬を飲んでベッドに横になった。

「新一！」

「ん……。」「

「大丈夫？」

「ああ。薬飲んだからもう平気だよ。」

「あの……。新一の病気の研究者が作った薬？」

「ああ。これで完全に戻れるって……。」「

「そっか。新一、顔色良くなったみたいだよ。」

「治ったって事なのかな？・・・今までごめんな。いろいろ。」

「いいよ。新一が帰ってきてくれただけで嬉しいから。・・・そういえば新一ってさ、コナン君に似てるよね？」

「えっ てかさ・・・今まで黙ってたけど・・・。」

「でもね、コナン君は新一なんかよりもかわいかったから違うよね。もし新一がコナン君だったらぶん殴るけど。」

「え、なんで？」

「だって一緒にお風呂とか入ったもん！もし新一だったら一生口聞
いてやらないから！」

「はは・・・。」

「まあ、そんな事あるわけないけど！」

蘭に俺の正体を話す日はまだまだ先になりそうだ。

FILE 14：実行（後書き）

重大なミスを犯しました、

15話を14話の所にupしてありました。

ご指摘ありがとうございます。

11・16

FILE 15：秘密

「みてみて！新一。コナン君から手紙来た！」

新一は両親が住んでいるロスから差出人がコナンの手紙をわざわざ送ってもらったのだ。

蘭姉ちゃんへ

元気ですか？

僕は元気だよ！

新一兄ちゃんと

仲良くやってる？

遠い所にいるから

すぐは行けないけど

また日本に行つて、

蘭姉ちゃんに

会いたいな。

江戸川コナン

「んー……。」

「どーした？蘭。」

「コナン君に新一が帰って来たこと言っただけかなー？って……」

（あーやべっ……。）

いつか話すその時までコナンは存在し続ける……。

それまではコナンの存在を疑わないで。

1人2役はなかなか大変なんだからな。

まだ秘密は打ち明けられそうにないけど、いつかは話すからな。

「そついえば、蘭……。」

「ん？なあに？」

「この前行けなかったからさ、トロピカルランド行こっか！」

「うん！」

コナン君へ

私は元気だよ。

いまだから言えるけど、

コナン君が新一なんじゃないかって思ってたの。

もしそうだったとしても

私は受け止めるよ。

って、コナンに言っても

意味ないか・・・。

p . s . 私も会いたいよ。

毛利蘭

さっきはわざと言いにくくしちゃった。

コナン君から本当の事を聞くのが怖かったの。

もう言われることは分かってる。

またいつか話してくれるまで待つてるよ。

次話してくれたら最後までしっかり聞くから。

それまでは知らないふりしておくね。

ばれないと思ってる名探偵さん。

FILE 15：秘密（後書き）

やっと完結しました・・・

最後まで読んでいただきありがとうございました。

感想、メッセージお待ちしております（＾＾）

リクエスト受付中です（＾＾）

11・20

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8780h/>

俺の秘密

2010年10月9日23時25分発行